

大正期のテロリズム

— ロシア思想の影響 —

河原地 英 武

Terrorism in the Taisho Period: Influence of Russian Thought

Hidetake KAWARAJI

はじめに

明治時代のわが国は、欧米列強の制度、思想、文物を貪欲に取り入れ、国家を欧化させることに努めたが、大正時代になると社会もある程度落ち着き、欧化の波も静まりをみせた。そして日本独自の価値観や風土が顧みられるようになった。それは平安時代の中期から後期にかけて、唐風文化から国風文化に改まるのと似た現象であったといえるかもしれない。すなわち大正期は国風追求の時代である。そのなかで、日本の風土に合うものとしてロシアの思想が注目された。

ロシアへの関心は第一に、ロシア革命に結実する社会主義思想の勃興と呼応するものであった。しかしそれだけでなく、英米仏を中心とする西欧文明のメインストリートから外れたロシア文明の辺境性が、日本の立場とよく似ていたことへの親近感もあったことと思われる。さらにはロシア文学に見られる精神風土や抒情的な国民性が日本人の好尚と合致したことも挙げられるだろう¹⁾。

本研究では 19 世紀中葉から 20 世紀初頭に現れたロシアの革命思想、とりわけその鬼子ともいえるニヒリズムやテロリズムがわが国にいかを受容され、独自の展開を見せたのかを考察することとした。

1 ロシアの革命思想と日本

(1) 西欧派とスラブ派

19 世紀の半ば、ロシアでは国家の発展形態をめぐる議論が活発化したが、その論調を大別すれば西欧派とスラブ派にわけることができる²⁾。

西欧派の人士は、英仏など当時の先進的なヨーロッパの教養を身につけ、西欧的市民社会に憧れ、18世紀のピョートル大帝による改革を高く評価し、ロシアの後進性の克服と個人の自由を求めた。彼らの多くは貴族地主階級であって、民衆に対する啓蒙に大きな関心を抱いたが、その方向性については、帝政下における立憲議会制を目指す者と、マルクス主義に鼓吹され、よりラディカルな民衆による革命を主張する者に分かれた。しかし、どちらの立場もロシアにおける資本主義の発展を前提条件としていた点で、まさしく西欧的であったといえよう。

これに対しスラブ派の人々は、ロシア正教を精神的な支柱とし、ロシア古来の共同体（ミール）に価値を認め³⁾、個人主義と資本主義に毒され腐敗堕落した西欧の模倣は根絶すべきだと考える立場に立った。彼らはピョートル大帝による西欧化を過ちと見なし、ロシアにはロシア独自の使命があるとするメシア思想を唱えた。

スラブ派もまた、その志向性によって二つの潮流に分けることができる。一つは西欧的価値観を非スラブ的であると拒絶し、正教の指導者でもある皇帝を最高権威とする帝政の存続を唱える思潮である。この立場に立つ者は、西欧的な資本主義の発展を害悪とみなし、むしろ反資本主義的なイデオロギーをもち、近代以前の中世的調和を理想とした。正統的な近代化の波がロシアに及ぶと復古的な思想を鼓吹したのである。もう一つの潮流は、農奴以前の農村共同体を原始共産主義としての理想郷と考え、一方では帝政を否定しつつも、他方では西欧的な議会制民主主義にも反発し、民衆による直接民主主義的な自治社会を夢想した。その思想の先鋭に立つ者は、ナロードニキとして独自の革命思想を有し、「民衆の中へ（ブ・ナロード）」をスローガンとし、資本主義を経由しない共産社会の実現に向けて、皇帝や貴族の殺害をも含むテロリズムへと傾斜する者もあった。

(2) 日本における革命思想の受容

革命思想という観点からロシアの西欧派とスラブ派を評価するならば、どちらも現状をよしとせず、大胆な方向転換によって国家体制を一新しようと志向する点で急進的な思想であったと思われる。ただし前者はロシアの後進性を忌み嫌い、西欧諸国の列に伍さねばならないと考え、後者は西欧の模倣こそ唾棄すべきものと見なし、正教を文明を基礎にしようとした。

19世紀後半になると、ツルゲーネフの『父と子』（1862）のなかで用いられた「ニヒリスト」が流行し、貴族階級に属する父親世代を否定し、行動する若者の理想となった。ツルゲーネフ自身は典型的な西欧派の知識人であったが、ニヒリストの思想はスラブ派の思潮とも共鳴し合い、1870年以降にナロードニキ（人民主義者）を生み出したといえる。彼らは理想郷である「ミール」を基盤として社会主義運動を展開するが、厳しい取り締まりにより、一部がテロリズムへ進むこととなる。

ロシアの革命思想は、西欧由来のマルクス主義のほかにアナーキズム（無政府主義）、ニヒリズム（虚無主義）、サンジカリズム（労働組合主義）、ボリシェヴィズム（多数派主義）等、様々な形態を

とった。当初ツルゲーネフが『父と子』のなかで描いたニヒリズムは必ずしもネガティブな思潮ではなかったが、その意味合いは変質し、20世紀に入るとしばしばテロリズムと同義で用いられるようになった。

周知のように、ロシアの思想が日本の知識人に与えた影響は極めて大きい。いくつかの事例を挙げれば、武者小路実篤はトルストイに傾倒し、自らも「新しい村」の建設を目指したし幸徳秋水や大杉栄はクロポトキンの研究を通じて社会主義を学んだ。1910年以降では、大逆事件、原敬暗殺事件、安田善次郎暗殺事件、二重橋爆弾事件、虎ノ門事件、朴烈事件、福田大将狙撃事件、「ギロチン社」事件など一連のテロリズムが起こったが、その思想的背景には社会主義だけで括ることはできないアナーキズムやニヒリズムの影響もうかがわれる。

もとより日本の革命思想はロシアの引き写しではない。決定的に異なるのは、ロシアですこぶる大きな影響をもつ正教がわが国には存在しないことである。日本人はロシア文学の翻訳を通じてその思想を受け入れたものの、宗教をどれだけ深く吸収し得たかは疑問である。他方、日本はロシアにない独自の革命的な系譜を有している。すなわち幕末・維新の思想家や活動家の存在である。佐久間象山、大村益次郎、本間清一郎、坂本龍馬、中岡慎太郎等々の影響は、日本の革命思想に少なからぬ作用を及ぼしたと考えられるのである。この流れは大正時代を越え、「昭和維新」にまで連なるものであろう。

2 梶井基次郎の「檸檬」をめぐる考察

(1) 成立の背景

梶井基次郎の代表作「檸檬」は同人誌『青空』創刊号（大正14年1月1日刊）に掲載された。この小説の終わりの部分で主人公が爆弾に見立てたレモンを丸善書店の棚に積み上げた本の上に据えるくだりは意表をつく発想で、読者に忘れがたい印象を残すこととなった。「丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう」⁴⁾という一節にも見て取れるように、主人公は犯罪者気分浸っている。しかも「大爆発」を幻視しているところから、爆弾テロの首謀者に自らをなぞらえているのである。

ただし、これはあくまでも夢想であって、現実には何事も起こらない以上、これを犯罪小説と呼ぶことはもちろんできない。とはいえ、梶井が爆弾を仕掛けるという発想をどこから得たのかは興味深い問題だろう。これは一種のテロを夢想する行為である。そこには実際のテロ事件との関連があるのだろうか。あるいはそれに対する共感といった政治的な要素は見いだせるのか。そのへんの事情を探るために、この小説のプロットが構想されるまでの経緯を跡付けてみたい。

最初にレモンが主題として現れるのは、大正 11 年に書かれたとおぼしい詩草稿「秘やかな楽しみ」である。22 行のうち、終わりの 6 行を引用すれば、「丸善のほこりの中に、一顆のレモン澄みわたる、／ほゝえまひて またそれを とる、冷さは熱ある手に快く／その匂ひはやめる胸にしみ入る、／奇しきことぞ 丸善の棚に澄むはレモン、／企らみてその前を去り……／ほゝえみて それを見ず」とある⁵⁾。「企らみて」の解釈が難しいが、少なくともレモンを爆弾になぞらえる趣向は見られない。

再びレモンが作品のなかに現れるのは、大正 11 年末から 12 年秋に書かれたノートに収められた作品の断片においてである。これは上の詩草稿を散文化したもので、レモンを用いて小説を構想していたことがうかがえる。「レモンはその中心に冴かに澄み渡つてゐるのである。私はこれでよしと思った。そしてそのまゝ、後も見ずに丸善を出た。そしてその日一日、そのレモンがどうなったことかと思ひ回らしては「楽し」微笑んでゐた⁶⁾と記されているが、爆弾との関連付けは見られない。

三度目にレモンが取り扱われるのは、大正 13 年秋に書かれた「瀬山の話」と題する短編小説のなかである。この作品は「私」が瀬山という奇矯な性格の人物を語るという内容で、その作品において、瀬山が書いた奇妙な小説を紹介するという形で「檸檬」が挿入されているのである。ここで初めてレモンが爆弾と結び付けられた。その部分を引用すれば、「次に起つた尚一層奇妙なアイデアには思はずぎよつとした。私はそのアイデアに惚れ込んでしまったのだ。／私は丸善の書棚の前に黄金色に輝く爆弾を仕掛に來た——奇怪な悪漢が目的を達して逃走するそんな役割を勝手に自分自身に振りあてゝ、——自分とその想像に酔ひながら、後をも見ずに丸善を飛出した⁷⁾と語られている。

おそらく梶井はこの「瀬山の話」をもう少し引き延ばし、中編仕立てにする構想をもっていたと思われるが、結局それは断念し、「檸檬」のみを取り出して推敲したうえ、同人誌『青空』の掲載作品としたのである。このようにして「檸檬」が今日の形に完成したのは、大正 13 年 10 月のことだと推定される。

(2) 「檸檬」の非政治的性格

大正 12 年の段階ではただのレモンに過ぎなかったものが、翌年秋には爆弾と二重写しにされることになったのはなぜか。この創作上の秘密を解き明かす客観的な資料は残念ながら見当たらない。この変化を促すような社会的事件があったという証拠もない。結局、作家の内面に何事かが生じたと考えざるほかなさそうである。

ただ比較的はつきりと言えることは、梶井が本来的に非政治的な人間であつて、レモン爆弾の着想にしても社会的な問題意識からもたらされたのではないことである。「檸檬」の主人公は「肺尖カタルや神経衰弱」で苦しみ、「背を焼くような借金」を抱えて困窮している。しかし社会主義思想に親しむわけでもないし、階級意識に目覚めるのでもない。彼がかつては足繁く通い、今は爆破を妄想す

るほどに疎ましく感じている丸善に対しては、「私にとっては重く居る場所にはすぎなかった。書籍、学生、勘定台、これらはみな借金取の亡霊のように私には見えるのだった」と述べているものの、この嫌悪感はいくまで個人的な感情のレベルにとどまり、社会性を帯びるものではないのである。

そもそもこの小説のなかでレモンは何を寓意しているのであろうか。梶井はこう記す。「疑いもなくこの〔レモンの――引用者〕重さは総ての善いもの総ての美しいものを重量に換算してきた重さである」と。すなわち主人公の意識は審美的なのである。

小説のなかでレモンを本の上に置いた場面を読んでみたい。「見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の諧調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまっていて、カーンと冴えかえっていた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。」この「変に緊張している」という感覚こそが爆発を幻想する誘い水の働きをしているのである。

これに続けて梶井は「不意に第二のアイデアが起った。その奇妙なくらみは寧ろ私をぎよっとさせた」と述べ、自分が「丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けてきた悪漢」であり、「もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなに面白いだろう」と想像して夢中になるのだ。これは詩的なインスピレーションがもたらした感情の浄化作用にほかならない。

梶井の想像力におけるこのような非政治的性格は、決して彼独自のものではない点に留意したい。むしろこれは大正時代の芸術家や詩人たちに共有されていたと思われる。たとえば芥川龍之介や谷崎潤一郎、佐藤春夫や若き日の川端康成といった作家たち、萩原朔太郎や竹久夢二といった詩人や画家もまた唯美的な傾向が強かった。志賀直哉や有島武郎など社会的意識が高そうに見える白樺派の文士たちも、その思想と行動においては非政治的であったといわねばならない。大正知識人は、社会主義に共感を寄せたにせよ、本質的には美に殉じた人々であった。しかしこのような傾向は、のちに述べるように、ニヒリストやテロリストたちの心性と通底していたと考えられるのである。

3 ロープシン『蒼ざめた馬』について

(1) 『蒼ざめた馬』の概要

ボリス・ヴィクトロヴィッチ・サヴィンコフ（1879-1925）がロープシンの筆名で発表した『蒼ざめた馬』⁸⁾は、20世紀初頭におけるロシアのテロリストたちを描いた中編小説である。1907年にニースの出版社で刊行されると、欧州で爆発的な人気を博したという⁹⁾。

その概要を記せば、物語は日記形式で綴られ、3月6日に始まり10月5日で終わっている。話者は「大英帝国臣民ジョージ・オブライエン」という偽名を用いてロシアに入り、モスクワでテロリスト・グループと落ち合い、専制政治打倒のために総督を暗殺すべく爆弾テロの準備を進め、本懐を遂

げるまでのことを詳細に記している。ただし出来事の淡々とした記録にとどまらず、ロシアの美しい自然を叙述し、テロリストたちの精細な人物描写を行い、さらには人妻との恋愛模様や宗教観、心の葛藤などを織り込み、さながら散文詩を思わせる静謐で格調高い散文に仕上げている。

表題は新約聖書のヨハネ黙示録第6章第8節「われ見しに、視よ、青ざめたる馬あり、之に乗る者の名を死といひ、陰府これに随ふ、かれらは地の四分の一を支配し、飢饉と死と地の獣とをもて人を殺すことを許されたり」¹⁰⁾からとられている。このことからわかるとおり、本書は宗教がきわめて大きな比重を占め、現に随所にヨハネ黙示録の言葉が引用されている。

なかでも注目すべきはワーニャという名の同志である。彼は敬虔なキリスト教の信者で、神の愛の名において要人殺害を企てるのだが、一方ではその行為と教義との乖離に悩み、懊悩しつつも暗殺を実行して捕らえられ、刑死するのである。これに対して話者は、やはりキリスト教徒ではあるものの、神に対しては懐疑的であって、むしろその心情はニヒリズムそのものである。本書の末尾近くでは次のように述べている。

わたしは奴隷の祈りなど捧げたくもない……キリストには福音で世界に灯をともしさせるがいい。おだやかな世界などわたしに用はない。愛で世界を救済させるがいい。わたしに愛は不要だ。わたしはひとりである。わたしはたいくつな芝居小屋から出ていこう。そのとき、天空に神殿の扉が開かれるだろうが、なおわたしは言うだろう。すべては虚偽であり、すべては空の空である、と¹¹⁾。

彼が「すべては空の空である」と述べるとき、その心は虚無の闇に領されている。だが、この話者を含め、登場する人物は決して冷酷ではない。むしろそれぞれに感情豊かで、さらにいえば愛と優しさにみちている。その意味では、本書は心優しきテロリスト群像といった趣があるのだ。

ところでサヴィンコフ自身、テロリズムの実行者であった。その経歴をかいつまんで記しておく。

彼は1879年に判事の子として生まれた。比較的恵まれた階級の出であったといえよう。ワルシャワ中学からペテルブルク大学へ進んだが、革命運動に身を投じて退学した。逮捕と流刑を体験するなかで思想は急進化し、エスエル党（社会革命党）に加わった。さらに戦闘団の一員として頭角を現し、責任者に任命され、テロの先頭に立つこととなった。

1907年にロープシン名義でロシアのリベラルな雑誌『ロシア思想』に「蒼ざめた馬を」発表し、物議をかもしたという。第一次世界大戦が勃発すると義勇兵としてフランス軍に従軍した。1917年の二月革命では政府の役職についたが、十月革命後はソビエト政権の打倒を目指す闘争に参加した。1924年、ポーランド潜伏中に逮捕され、翌年、自殺したといわれる。

『蒼ざめた馬』のほか、何冊かの小説や詩集を著しているが、『夢幻の人びと』、『黒馬を見たり』、

『テロリスト群像』などは邦訳され（いずれも邦訳名）、わが国の若い世代に少なからぬ影響を及ぼしてきたと思われる¹²⁾。

(2) 日本における受容

本書のわが国における最初の訳書は、ロープシン著、青野季吉訳『蒼ざめたる馬』（冬夏社、大正8年）である。同書を国会図書館所蔵書のプリント・オン・デマンド版を注文したところ、ロープシン著青野季吉訳『国会図書館所蔵図書 蒼ざめたる馬 合本版』（イズム・インターナショナル、平成28年）が届けられた。「合本版」と銘打ってあることから察するに、分冊で販売されたようである。この訳書は大正13年に随筆社という出版社から再刊されているが、こちらは一冊本である。訳者の青野は早稲田大学英文科卒業の文芸評論家であるから、おそらく翻訳は英語版からの重訳であろう。

日本でロープシンの著作や名前が広く知られるようになったのは、大正10年以降らしい。文芸評論家の平野謙もある回想のなかで、冬夏社版のほうは知らず、最初に読んだのは随筆社版であったと述べている。なお平野によれば、のちに水守亀之助が人文社出版部と新しい出版社を興し、随筆社出版部の事業を受け継ぎ、ロープシンの書を出し続けた由である¹³⁾。

当時の新聞をみると、ロープシンの思想が知識人のあいだで話題になっていたことがわかる。たとえば大正12年8月17日付及び19日付の『東京朝日新聞』に工藤信之介が「断想」と題した随想を寄せているが、そのなかで工藤は、中西伊之助の論説を取り上げ、ロープシンの作品（但し『蒼ざめたる馬』ではなく『曾て無かりし事』）を引用しつつ、ニヒリストやテロリストを尊ぶ風潮に警鐘を鳴らしている。8月30日付の同紙に、中西は「閑論——工藤氏へ——」を掲載し反論を試みた。その論旨は必ずしもロープシンの立場を擁護するものではないが、彼のようなテロリストをアナキストやニヒリストと同日に論じてはならないと主張している。

詩人や作家もロープシンの作品に啓発されたらしい。というのも、萩原朔太郎は詩集『青猫』（大正12年、新潮社刊）に「蒼ざめた馬」という題の詩を載せているし、林芙美子は昭和4年に南宋書院から『蒼馬を見たり』というタイトルの詩集を上梓しているのである。なお林の詩集には、アナキストとして著名な石川三四郎と辻潤が「序」を寄せているが、辻の文章には「大正十四年十二月二十四九日」と日付があるので、林の詩がそれ以前に執筆されたことはまちがいない。萩原と林の作品にはロープシンへの言及はないものの、二人がクリスチャンとして日頃聖書に親しんだという形跡はないことから、青野訳の『蒼ざめたる馬』を意識して執筆した作であることは確かであろう。

萩原恭次郎も大正14年、長隆舎書店から『死刑宣告』と題する前衛的な第一詩集を出しているが、そこにもテロリズムを連想される語彙が散りばめられている。特に「葱と爆弾と女の足」という作品には「葱と爆弾／自動車！／走る 走る 走る／田舎者の涙よ／流れろ 流れろ／臭い豚を殺せ／外国皇子の白粉くさい肉体に対して」といった詩句が書き連ねられているが、「爆弾」や「外国皇子」

が帝政ロシアにおけるテロを連想させなくもない。

彼の詩集にもロープシンの名が直接出てくることはないが、ドストエフスキー作『罪と罰』の主人公であるラスコーリニコフを主題とする詩が収められていることから、少なくともロシア文学の影響を受けていることは疑いない。大正時代はテロリズムが（メタファーとしてであれ）文学者たちの心を捉えた時期だといってもよからう。

4 大正期のテロリストたち

大正期のテロリストに関する多くの述作を残している秋山清は、彼らを第一に「やさしき人々」と規定し、さらには本質的に「詩人」であったと記している¹⁴⁾。この二つの特徴は奇しくもロープシンが『蒼ざめた馬』で活写したテロリスト像と符合している。これは日本のテロリストがロシアからの影響を受けたというよりは、むしろ20世紀初頭（邦暦では大正）のテロリストが共有する性格であったと考えられる。以下では主として秋山の著作に依りつつ、わが国の二人のテロリストを取り上げ少しく論じてみたい。

まずは和田久太郎である。彼は明治26年に貧しい家庭に生まれ、子供の頃から丁稚奉公をするなかで、社会の底辺に生きる人々に共感し、社会主義思想へ傾倒した。大杉栄に兄事し、社会運動家、アナキストとして活動したが、関東大震災の直後に大杉が伊藤野枝、橘宗一（大杉の甥）とともに憲兵に連行され殺害されたことに衝撃を受けた。この殺害の首謀者の一人である戒厳司令官の福田雅太郎大将の狙撃・暗殺を計画したものの失敗に終わった。和田は捕らえられ、無期懲役の刑に処せられたが、昭和3年、秋田刑務所の監獄で自害した。享年36であった。

和田は子供の時分から情に厚く、また温厚な人柄で、「久さん」と愛称で呼ばれていた。尋常小学校を卒業後、12歳で明石高等小学校に入学したが、肋膜炎と眼病のために退学を余儀なくされた。このように教育らしい教育を受けたことはなかったが、早くから文学に目覚め、15歳から俳句に熱中し、俳誌「紙衣」所属の俳人となった。

和田は暗殺の失敗後、獄中で多くの随想と俳句を残した。生前、彼の盟友である近藤憲二がそれらを一書にまとめ、和田久太郎『獄窓から』（労働運動社、昭和二年）を編纂した。同書は彼の死後に増補され、同じ表題で昭和5年に改造社から再刊されている¹⁵⁾。その文章を読むと、激したところは一切なく、まことに快活かつ穏やかな文体で、ユーモア作家としての天分があったのではないと思われる。俳句も伝統的な作風で、プロレタリア作家に特有の政治性も見出せない。彼の文業から浮かび上がる個性は、あくまで非政治的なのである¹⁶⁾。

もう一人の人物は中浜哲（本名は富岡誓）である。彼もまた大杉栄に心酔し¹⁷⁾、その殺害への復讐を企てたが失敗し（実際にはのちに昭和天皇となる摂政宮へのテロを計画していたとされる）、大

阪・北浜銀行員殺人事件の首犯として逮捕され、大正15年絞首刑に処せられた。29年の生涯のうちにいくつかの詩と小説と戯曲を残している¹⁸⁾。

中浜は和田と違って（漁村の生れではあれ）旧家の出であり、経済的には比較的恵まれていたといえるだろう。しかし中学を退学すると郷里を出て、一時は軍隊に入るなど、その行動は常に何事からの反抗心に突き動かされていたようだ。早稲田大学に在籍したともいわれるが確かな記録は存在しない由である。やがて社会主義運動に接近し、「自由人連盟」や「小作人社」といった団体の創設にかかわるなかでテロリズムへの傾斜を強めていった。大正11年、古田大次郎などと語らって「ギロチン社」（分黒党とも）というテロリスト集団を結成し、来日中のイギリス皇太子の暗殺計画などを立てるが、結果的にそのテロはことごとく失敗している。

このように初志を貫徹できずに終わった中浜については、かなり厳しい評価もある。たとえば小松隆二は「中浜のなかの矛盾・脆弱性・不徹底さは、テロリズムにいたる中浜の対応にもよくあらわれている」と指摘し、「学業にしろ、文学活動にしろ、組織運動にしろ、またテロリストにしろ、たとえ状況がその十分な開花を許さなかったにしても、一つの結果をみずに、中途半端に終わったのが、中浜の足跡であった」と結論付けている¹⁹⁾。30歳前に早世した人間への評価としては厳しすぎる嫌いもあるが、この無軌道ぶりと計画性の欠如もまた、非政治的人間であった大正期テロリストの属性といえるかもしれない。

テロが失敗に終わったという点では、先の和田の場合も同じであった。また総じてこの時代のテロは、不首尾に終わったものが多い。難波大助による虎ノ門事件、朝日平吾による安田善次郎暗殺事件、中岡良一による原敬暗殺事件、藤田留治郎による二重橋爆弾事件、金社燮による二重橋爆弾事件、徐相漢による李王世子暗殺未遂事件、梁樞煥による関元植暗殺事件など現に多くの事件が起こり、なかには政局に深刻な影響を及ぼしたものもあったが、他方でエピソードとして済まされた事件や数多くの未遂事件もあったようだ。目的を達成し得るだけの強固な意志に欠ける彼らの人間的弱さを指して、秋山清は「やさしき人々」²⁰⁾と評したようにも思われる。

おわりに

秋山清はこう述べている。「理想主義とヒューマニズムと自我意識とを適当に含有した人格、というものが有り得るとすれば、その人を『詩人』と私は呼ぶことができるだろう。もう一つつけ加えて、権威権力から離れ得た人格であればなおさらと考える。／はからずも私は大正期の末に現われてテロリストといわれた人々の中に、そのような詩人的な人格を知ってから久しい²¹⁾。」

秋山自身がプロレタリア詩人であるため、テロリストたちを美化しすぎている感はあるものの、詩人とテロリストの相似を指摘している点は示唆に富む。すなわちここにわれわれは、ロープシンが描

くロシアのテロリストと大正期日本のテロリストの共通項を見出すことができる。

社会主義、無政府主義、ニヒリズムといった思想がロシアを経由してわが国にもたらされたことは、多くの図書文献が邦訳されていることから明らかであろう。但しそれがどのような形で受容されたかについては、今後さらに具体的な分析が求められる。

また、ロシアと日本では決定的に異なる点がある。それは宗教の問題である。ロシアにおいてはロシア正教の存在がすこぶる大きい。神を否定することが精神にもたらす空洞はとてつもなく大きく深いだろう。神なきところにいかに聖なるものを見出すのか。本来ロシアにおけるニヒリズムとはそのような葛藤と緊張をはらんでいるはずだ。そしてこうしたニヒリズムがテロリズムの根底にある。

他方、ロシア的な一神教をもたない日本では、ニヒリズムにこの種の宗教的葛藤が存在しない。それゆえ、一口にニヒリズムといっても、ロシアと日本ではその内実は異なるといわねばなるまい。今後はその差異に注目しつつ、日露間のテロリズム思想の比較を行うことが必要だと思われる。

注

- 1) 日露両国の国家的アイデンティティの比較については、次を参照。東郷和彦・A.N. パノフ編著『ロシアと日本 自己意識の歴史を比較する』（東京大学出版会、平成 28 年）、「序章 アイデンティティを考える（A.N. パノフ）」。
- 2) ロシアにおける西欧派、スラブ派およびナロードニキについては次を参照。前掲『ロシア・ソ連を知る事典（増補版）』（平凡社、平成 9 年）、「スラブ派」（長縄光男）、309 ページ、「西欧派」（今井義夫）、309～310 ページ、「ナロードニキ」（和田春樹）、414～415 ページ。
- 3) ミールについては次を参照。前掲『ロシア・ソ連を知る事典（増補版）』、「ミール」（保田孝一）、571～572 ページ。
- 4) 梶井基次郎「檸檬」からの引用は、梶井基次郎『檸檬』（新潮社、新潮文庫、平成 15 年 63 刷改版）による。
- 5) 『梶井基次郎全集 第一巻』（筑摩書房、平成 11 年）、336～337 ページ。
- 6) 『梶井基次郎全集 第二巻』（筑摩書房、平成 11 年）、264～265 ページ。
- 7) 同前、59 ページ。
- 8) 邦訳名はローブシン、川崎淡訳『蒼ざめた馬』（岩波書店、岩波現代文庫、平成 18 年）による。
- 9) 同前、「あとがき」。
- 10) 『文語訳 新約聖書 詩篇付』（岩波書店、岩波文庫、平成 26 年）、561 ページ。
- 11) 前掲『蒼ざめた馬』、217～218 ページ。
- 12) 略歴は主として次に依拠した。前掲『ロシア・ソ連を知る事典（増補版）』、「サビンコフ」（和田春樹）、235 ページ。また、前掲『蒼ざめた馬』には訳者による精緻な作家論（「サヴィンコフ＝ローブシン論」）が付されている。
- 13) 『『蒼ざめた馬』と私——平野謙』、ローブシン、工藤正弘訳『蒼ざめた馬』（晶文社、昭和 42 年）、202～203 ページ。
- 14) 秋山清『やさしき人々——大正テロリストの生と死』（大和書房、昭和 55 年）、同『ニヒルとテロル』（平凡社、平成 26 年）。

- 15) 戦後はさらに次の2冊が再刊されている。和田久太郎『獄窓から ― 増補決定版 ―』（黒色戦線社、昭和46年）、同『獄窓から ― 真正版 ―』（黒色戦線社、昭和63年）。
- 16) 和田久太郎に関しては次の評伝がある。松下竜一『久さん伝 ― あるアナキストの生涯』（講談社、昭和58年）。
- 17) 大杉栄の死を悼んで作られた前衛詩「杉よ！眼の男よ！」は中浜の代表作として知られる。
- 18) 中浜の主要作品は関係者による回想等とともに次の書籍にまとめられている。『中浜哲詩文集』（黒色戦線社、平成4年）。
- 19) 同前『中浜哲詩文集』、小松隆二「テロリスト詩人・中浜哲の思想と生涯」307～308ページ。
- 20) 前掲『やさしき人々 ― 大正テロリストの生と死』。
- 21) 同前、242ページ。